

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 30 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520231

研究課題名(和文) 西洋文化圏における「凝視」と「注意」の文化史的意義の研究

研究課題名(英文) A Study of the Cultural Historical Significance of 'Staring' and 'Attention' in the West

研究代表者

阿部 公彦 (ABE, MASAHIKO)

東京大学・人文社会系研究科・准教授

研究者番号：30242077

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では「凝視」と「注意」という相互に深く結びついた人間の行為について、主に英語圏のテキストを素材にして考察をした。成果としてはっきりしたのは、一見、当たり前の知的プロセスの一部としてとらえられがちな「凝視」や「注意」が、実は私たちの知の働き方やスタイルに大きな影響を与え、ひいては人間が何を考えるかということまで左右するようなきわめて根源的な波及力をもった要素だということである。また歴史的な視点から考えても「凝視」が知の中心を占める時代がある一方、「凝視」よりも「注意散漫」や「うつろさ」が知の重要な要素ととらえられる時代があるという点は興味深い。

研究成果の概要(英文)：In this research, I tried to show how staring and attention play important roles in the western culture. We tend to think that the human act of focusing is a natural and almost trivial process in the functions of the mind, but I revealed how human attentiveness is historically relative; it is formulated in specific historical and cultural contexts. In this sense, one's belief that one can understand an object better by looking at it with special attention needs to be addressed from a view point which can also posit a non-attentive way of seeing, such as lack of attention, digression, and improvisation. These factors are usually seen as obstacles to our understanding of the world, but they may form essential part of the intelligence in modern culture.

研究分野：英文学

キーワード：英文学 イギリス史 西洋史 アメリカ文学

1. 研究開始当初の背景

本研究は主に西洋文化圏における視線の機能に注目し、文学、芸術、演劇などさまざまな文化領域において「凝視」および「注意」という行為がどのように機能しているかを調査するとともに、より深いレベルでは、近代文化の形成過程において「凝視」に類する知的な姿勢がどのような役割を果たしてきたかを明らかにしようとするものである。

「凝視」とは文字通りには、目をこらして対象をじっと見るという態度のことである。そのもっとも明瞭な表れは、西洋近代絵画における一点透視的遠近法の発達にみることができる。遠近法は一箇所に消失点(vanishing point)を設定し、その点から逆算する形で空間の骨格を構成するものだが、二次元的な絵画面に三次元的な空間を表現するためのこの方法が、あくまで仮の約束にすぎないもの、つまりフィクショナルな仮構であることはいうまでもない。遠近法とは、言ってみれば、人間の目が陥る錯覚をうまく利用して、まるで空間がそこにあるかのように見せる「技術」である。それは画面にかかわる一種のレトリックであり、あくまで慣習的な技法にすぎない。

しかし、遠近法の発達とほぼ平行して形成された西洋近代の文化は、このような遠近法的な眼差しとさまざまな点で重なるような約束事を前提としてもきた。その何よりの表れが、たとえば「物事はじっと見つめることで、その本質をより明らかにする」というような視覚偏重型の姿勢である。そこからは「真実に辿りつくには、奥へ、より深いところへと進んでいかねばならない」という考え方も生まれ出てくる。このような思考のパターンは、たとえばW・J・T・ミッチェル、藤巻明、鈴木聡訳『イコノロジー——イメージ、テキスト、イデオロギー』(勁草書房 1992)において批判的に考察されているように、フロイドやマルクスのそれをはじめとして、20世紀の知の原型となってきたようなテキストの多くにも確認することのできるものである。遠近法では、無限の彼方の一点に消失点を設定することが重要だが、その結果、「奥」や「深み」に秩序の中心を置き、そこから空間的に放射する形でひろがるような空間秩序が形成される。今、あげたような知的な「常識」は、そのような遠近法的な空間感覚と大いに重なるものである。人間の権力機構が、頂点にひとつの権力をおくようなピラミッド型として形成されがちなことにも、こうした遠近法的な空間秩序に内在する原理を読み取ることができる。

人間による注視が要請されるような場合は、文化の諸領域では数え切れないほど確認できる。たとえば美術館、図書館といった組織では、集約的な形でデータに対する注目がおこなわれる。こうした組織を成り立たせるのは、「人は自発的に凝視することを望むのだ」という考えでもあろう。しかし、逆に見

ると、美術館、図書館といった組織の存在そのものが、私たちに凝視することを示唆しているとも言える。凝視のための場に足を踏み入れることで、私たちは「人は凝視するものだ」という考えを、身をもって学ぶのである。こうした凝視の制度化は、凝視を誘うことによってはじめて成り立つようなさまざまな「作品」の世界でも同じように機能している。絵画とはちがい文字テキストの場合は、必ずしも時間をかけた視覚的な注視そのものが行われるわけではないが、文字による伝達を通して集中力の持続的な喚起を促すという意味では、それを凝視の一形態とみなすことができる。

このあたりの問題について持続的かつ網羅的な調査研究を行っている研究者としては、ジョナサン・クレーリーがその筆頭にあげられるだろう(遠藤知巳訳『観察者の系譜』(十月社 1997)、岡田温司ほか訳『知覚の宙吊り』(平凡社 2005))。クレーリーは19世紀の終わり、とくに1880年代に、主体と知覚をめぐる大きな変化が起きたとする仮説をとえ、同時代の膨大な言説を渉猟したうえで、マネ、スーラ、セザンヌという三人の画家の作品についての詳細な読みを提示する。クレーリーの議論の中心となるのは、「1880年代という時代をひとつの転換点にして、主体が統合された客体と面と向かうという認識のモデルが崩れた」とする主張である。この時代から、主体はもはや安定した統合体ではなくなり、外界からの情報を断片のまま、さまざまな感覚器官を総動員して受容することになっていく。そこでは対象と面と向かって凝視するというデカルト以来の近代的自我のモデルは姿を消し、かわって「注意」と「注意散漫」との間の絶え間ない揺れ動きの中で翻弄されるような、いわば「時間化された主体」が認識を行うことになる。

クレーリーの提言はたいへん刺激的なものであり、ベンヤミン、ベルグソン、ショーペンハウエルといった論者の議論をたくみに分析しながら展開される議論はたいへん説得力があるが、筆者としてはクレーリーのモデルにそのまま乗るのではなく、「注意」という興味深い概念にある程度掘りつつも、そこに依然として「凝視」の名残が原型として形をとどめていることにも気を配った。

2. 研究の目的

本研究の目的はふたつの段階にわけられた。まずひとつ目の目的としては、人間の知的営為に内在するこのような「凝視」の姿勢を、とくに現代の文字資料や芸術作品、社会制度など具体的な例の中に確認し、批判的に分析することにある。このような段階をへることで、凝視という行為を相対化してとらえ、それが必ずしも当たり前な知的プロセスではない、という認識を持つことが重要になる。筆者の専門分野は英米文学および文化なの

で、分析の対象とする資料や作品は英米のものが中心とはなるが、筆者の母国語である日本語による資料も、当然ながら研究の対象とした。

筆者はすでに英米圏における抒情表象を出発点にして、とくに問答形式の言説に焦点をあてた研究を行ってきた。そこで明らかになったのは、言説のやり取りの過程でいかに特定のポイントに語り手が注意を向けたり、あるいは読者の注意を惹いたり、という仕草が重要な働きをしているかでもあった。英語の場合は、こうした仕草はイタリアン体やパンクチューエーション、カッコなどの使い方を通して確認することができる（このあたりについては『英語文章読本』（研究社）参照）。

また、2008年に刊行した『スローモーション考』（南雲堂）ではすでに「凝視」をめぐる研究のきっかけは見えている。『スローモーション考』の論点のひとつは、対象を「ゆっくり」の中でとらえることが、人間の「凝視」の表現につながるるとともに、そこからさまざまな叙情性や生と死をめぐる思想が芽生えてもくる、といったことであった。

このような過去の研究成果を土台にしつつ第一段階の調査・考察を行ったうえで、本研究ではもうひとつの目的に進んだ。それは実際に「凝視」をあたり前の知的モデルとして組織されたり、構成されたりしている知的活動について、その問題点や限界を指摘したり、改善策や新たなモデルづくりを提唱したりすることであった。筆者の専門領域ととくにかけがえのないのは英文学研究や言語教育、とくに英語教育の分野なので、こうした分野の中で、積極的な提言をすることを視野に入れたわけである。

また、今回はとくに以下でもふれるような、「凝視からの逸脱」といえるような事例についても研究を推進した。「凝視」に集約されるような知的姿勢が、必ずしも人間にとって必然ではなく、あくまで約束事として前提とされてきたのだという点を踏まえ、これまでよりも柔軟に人間の認知活動についての考察を行うことができる。その最たる例が、「凝視」から逸脱していると見なせるような、たとえば「眩暈」、「突然の注意喚起」、「注意散漫」、「意気消沈」、「陶酔」、「催眠」といった状況である。こうした状況にあると見なせるような事例を細かく分析検討することで、そこで表現者と受容者がどのようなメカニズムに基づいたやり取りを行うのか、ということであらためて明らかにすることができる。そこでは一見、認知や探求の失敗と見なせるような事例が、じつはより創造的な知的活動に結びついている、といった知見を得ることも可能になってきた。

遠近法の研究には、すでに数百年にわたる歴史があるが、本研究は遠近法そのものを研究の対象とするものではなかった。あくまで

「凝視」がテーマである。つまり「じっと目をこらして見る」という行為を、近代文化におけるもっとも兆候的な知的活動としてとらえることで、これまでになかった角度から文化の見取り図を書き直すのが眼目だったのである。

より具体的には、「凝視」を中心テーマにすえることで、「絵画面を構成するための技法」という枠におさまらないような視点をとることが可能になり、その結果、文学テキストや絵画作品にとどまらず芸術・スポーツ活動、さらには教育システムや社会的な組織などにまで話題がおよぶような、スパンの広い研究の基礎をつくることができる。

絵画や文学の領域では、人間の認知の操作をめぐる研究はかなり洗練された段階まで進んでおり、さまざまなすぐれた知見がすでに発表されてもきた。しかし、残念ながら、こうしたすぐれた研究は、比較的「実践的」と見なされるような、教育現場のような場では十分に生かされてきたとはいえない。筆者はすでに問答研究に関する研究を遂行し一定の成果をあげているが、狭い意味での文学研究などで得られた知見は、しばしばこうした実践的な場においても有効に活用することができる。

3. 研究の方法

本研究は三つの段階にわけたおこなった。一つ目はもっとも基本的なもので、テキストの収集、検討、解釈である。文学テキストや美術作品、劇場での公演作品といった広い意味での「テキスト」を読み解いていく地道な作業がそこでは中心となった。二つ目のステップは、解釈そのものに対する批判的な再検討である。この段階では、すでに行われてきた解釈を、その受容の現場に差し戻すことで、「なぜこの作品はこのように受け取られてきたのか？ 読まれてきたのか？」といった問題を立てた。こうした段階をへて第三段階では、「凝視」をめぐる解釈や再解釈を公の場での議論に供した。

より具体的には、最初の段階では、現代絵画の分析を中心的におこなった。美術館、博物館、劇場などについてその「凝視」のシステムを検討するといった場合、向こうが「見せる」つもりのものを検討するだけでは十分ではない。向こうが「見せる」つもりではないような、裏側の部分、隠れた部分をも含めて検討することによりわかってくることもある。しかし、多くの場合、そのような部分は外部の者に対しては閉ざされているし、またその事情もある程度は理解できる。

このような第一段階の作業について、いまひとつ付け加えるべき重要なポイントとしては、「作品」という概念から自由になる、ということだった。すでにある作品を分類したり解釈したりするだけではなく、従来データと見なされることのなかった人間の活動を、

はじめて「作品」としてとらえて発掘する、ということがとても大事になる。そのためには、そもそも何が「作品」なのかという常識を疑ってみる必要がある。そのことを通し、「人間はこんなところでも凝視にとらわれているのか」というような発見につなげ、研究に斬新さをもたらそうと思ったわけである。

第二段階以降ではこうした知見を総合的に整理し直し、かつ、外部に向けて発信するというところを行った。このことについては以下の「研究成果」でより詳しく触れる。

4. 研究成果

今回の研究の成果はまずは著書『文学を凝視する』にまとめてある。本書で注目したポイントを列挙すれば、絵画を見るという行為の持つ意味の分析、文章を精読するという行為の持つ意味の分析、文章を批評的に読むという行為の持つ意味の分析、選挙と凝視の関係の分析、作家の記述におけるフラクタル的な視点の分析、知的活動における「難解さ」の持つ意味の分析、「注意散漫」の歴史的考察と個別作品の表象、といったことがあげられる。

本研究の最大の成果はおそらく「凝視」という行為に焦点をあてたことである。そもそも「凝視」が十分学問的考察の対象となりうるということを示しただけでも、成果はあがったといえることができるだろう。人間がそもそも「見る動物」であるということから出発して、じっと身を乗り出すようにして見ることがどのように人間の知的活動の支えとなってきたかを考察したわけである。

もちろん、個別の事例について、凝視がどのように機能しているかを具体的に検証したことにも大きな意味があった。とりわけ重要だったのは、フラクタルと文学作品における描写との関係を扱った研究、および、文章記述における「注意散漫」をあつかった研究であった。これらも『文学を凝視する』にまとめた論考におさめられている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 16 件)

阿部公彦、「ウォレス・スティーヴンズの無愛想」(上・下)『Web 英語青年』、査読無し、2月号・3月号、2013年、2-14/ 2-19

阿部公彦、「ふたつの冠婚葬祭小説 オコナーとトレヴァー」(上・下)『Web 英語青年』、査読無し、12月号・1月号、2012年・2013年、20-30/ 16-29

阿部公彦、「D・H・ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』の礼儀作法」(上・下)『Web 英語青年』、査読無し、10月号・11月号、2012年、18-27/14-27

阿部公彦、「アリスと「イライラ」 ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』」(上・下)『Web 英語青年』、査読無し、7月号・8月号、2012年、2-7/ 2-11

阿部公彦、「ジェーン・オースティンの不機嫌」(上・下)『Web 英語青年』、査読無し、5月号・6月号、2012年、2-11/2-13

阿部公彦、「女を嫌うための作法」(下)『Web 英語青年』、査読無し、4月号、2012年、2-11

阿部公彦「サロメと即興神話 ワイルドにおける曲線の意味をめぐって」、富士川義之・玉井暁・河内恵子編『オスカー・ワイルドの世界』(開文社 2013 537pp)、査読なし、96-112

阿部公彦「目の失敗 の物語 ウォレス・スティーヴンズとハワード・ホジキン」、庄司宏子編『絵のなかの物語 文学者が絵を読むとは』(法政大学出版局 2013 269pp) 査読無し、153-185

阿部公彦「大江健三郎と英詩 日本語の未開領域をめぐって」、「早稲田文学」6号(2013)、査読無し、322-332

阿部公彦「ナサニエル・ホーソーン『七破風の屋敷』の気遣う語り手」、西谷拓哉・成田雅彦編『アメリカン・ルネサンス 批評の新生』(開文社、2013、446pp) 査読無し、325-44

阿部公彦「百合子さんのお腹の具合」、「ユリイカ 特集：武田百合子 歩く、食べる、書く」、査読無し、2013年10月号、169-176

阿部公彦「佐藤泰志の主人公たちが痛い目に合うわけ」、福間健二監修『佐藤泰志 生の輝きを求めつづけた作家』(河出書房新社、2014、239pp) 査読無し、194-199

阿部公彦「英文学と事務能力 夏目漱石の四角四面を考える」、『現代文芸論研究室論集 れにくさ』、査読無し、5.2 (2014)、300-318

阿部公彦「発語の境界線 詩の恥ずかしさをめぐって」、『季刊 ビーグル』、査読無し、23号、2014、14-18

阿部公彦「「如是我聞」の妙な二人称をめぐって」、『太宰治研究』、査読無し、22号、2014、255-268

阿部公彦「蓮實重彦を十分に欲するということ 『ボヴァリー夫人論』の話者らしさをめぐって」、『群像』、査読無し、8月号、2014、150-161

[学会発表](計 14 件)

阿部公彦、文学会議、第1回大運河国際詩歌節(日中友好文学者会議・杭州) 2012年9月9日~9月13日、杭州百瑞国際飯店、杭州(中国)

阿部公彦「ワーズワスと詩の力」、英語英文学研究所学術講演会、2012年9月29日、東北学院大学(仙台市青葉区)

阿部公彦「私たちはなぜ詩が読めないのか?」、講演、2012年11月20日、西南学院

大学(福岡市早良区)

阿部公彦『『幸福な王子』を読む 受講者への五つの問いかけ』、日本ワイルド協会第三七回大会「鼎談 ワイルド作品を教育的に活用する」、2012年12月2日、慶應義塾大学・日吉キャンパス(横浜市港北区)

阿部公彦「『のぞき』の技法 誰が小説を解放するのか」、第85回日本英文学会全国大会シンポジウム「アメリカ小説の大衆的ふるまい 文学の通俗性と公益性をめぐって」、2013年5月26日、東北大学(仙台市青葉区)

阿部公彦「オルソンとイギリス J・H・プリンを中心に」、日本アメリカ文学会東京支部例会シンポジウム「チャールズ・オルソンって誰? 『マクシマス詩篇』って何? 大文字のHISTORYから小文字のhistoryへ」、2013年6月29日、慶應義塾大学三田キャンパス(横浜市港北区)

阿部公彦「英詩の甘み シェイクスピアの恋愛詩を読む」、立正大学英文学会特別講演、2013年9月22日、立正大学品川キャンパス(東京都品川区)

阿部公彦 シンポジウム「駱英『第九夜』を読む」、2013年11月2日、NHK青山荘(東京都渋谷区)

阿部公彦「嫌がる学生に無理矢理英詩を読ませることについて」、日本英文学会関東支部秋季大会シンポジウム「古典の困難 それでも、やっぱり、教えたい?」、2013年11月2日、日本女子大学(東京都豊島区)

阿部公彦「ですます調の文学 近代小説と丁寧体の可能性」、CPAG 国際シンポジウム、2014年6月28日、東京大学総合文化研究科(東京都目黒区)

阿部公彦「カウンセリングの文学 村上春樹から英文学まで」、名古屋大学英文学会サマー・セミナー講演、2014年7月11日、名古屋大学(名古屋市千種区)

阿部公彦「文学史を書くこと、文学史を教えること」(ディスカッサント)、日本英文学会北海道支部シンポジウム、2014年10月25日、札幌・武蔵女子短期大学(札幌市北区)

阿部公彦「詩人川崎洋 没後十年 かがやく ことば の息づかい」、西南学院創立100周年記念学術シンポジウム、2014年11月6日、サピアタワー五階サピアホール(東京都千代田区)

阿部公彦「英文学の諸事情」、日本フランス語フランス文学会関東支部シンポジウム「いま外国文学を教えるということ」、2015年3月7日、白百合女子大学(東京都調布市)

〔図書〕(計 4 件)

阿部公彦『文学を凝視する』、岩波書店、2012年、290+6

阿部公彦『詩的思考のめざめ』、東京大学出版会、2014年、218p.

阿部公彦『英語的思考を読む』、研究社、

2014、213p.

共著

竹内勝徳、彩流社、『環太平洋の想像力』、2013年、239-60(阿部公彦「ホイットマンの音量調節」)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等
<http://abemasahiko.my.coocan.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部公彦 (ABE Masahiko)
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号: 30242077

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: